

<報 告>

日本統治時代の台湾生活誌 ()

柴 公 也

本稿は、日本統治時代の台湾に生きた人々からの聞き取り調査による証言によって構成されたものである。

周知のように、台湾は、1895年の日清戦争後に清国から日本に割譲され、1945年の日本の敗戦までの50年間、日本の統治を受けている。この半世紀の中でも、主に後半の四半世紀の台湾の社会がどのようなものであって、どう変化したのか、また、日本人と台湾人がどのように交流し、お互いどのような思いで暮らしていたのかを、当時の台湾に生きた人々にインタビューして明らかにしようというのが本稿の目的である。

そのため、2009年の春から、何度も台湾を訪問し、旧知の台湾人に当時からよく知る年配の台湾人を紹介してもらい、これまで40人以上の方々にインタビューを重ねてきた。インタビューは、一回きりの場合もあったが、多い場合は、四～五回にも及んでいる。インタビューは、筆者が台湾語や北京語の会話能力を欠くので日本語で行っている。年配の台湾人の方々は、皆流暢な日本語の会話能力を有していたので、意思の疎通には、ほとんど問題はなかったと言って良いだろう。

日本人に関しては、やはり2009年の春から、台湾協会の旧知の方に適当な方を紹介してもらって、これまで20人以上の方々に面談や電話でのインタビューを重ねてきた。日本人に関しても一回きりというのは少なく、平均して二回はインタビューを重ねている。

その際、日本による台湾統治の是非を論ずるのが目的ではなく、当時の台湾がどのような社会であったのかを、光の部分も陰の部分も含めて、当時の台湾に生きた人々に出来るだけ率直に語ってもらい、日本統治時代の台湾の姿を後世に残そうとするのが本稿の主旨である。

これまで、日本統治時代の台湾に関する聞き取り調査は幾度となく試みられ、その蓄積も少なくない。

例を挙げると、単行本では山本禮子(1999)『植民地台湾の高等女学校研究』(多賀出版)、洪 郁如(2001)『近代台湾女性史』(勁草書房)、平野久美子(2007)『トオサンの桜』(小学館)、猪股るー(2007)『愛する日本の孫たちへ』(桜の花出版)、周

芬伶 (2008) 『憤れる白い鳩 二〇世紀台湾を生きて』(明石書店)、大谷 渡 (2008) 『台湾と日本 激動の時代を生きた人びと』(東方出版) などがある。

また、調査報告としては、弘谷多喜夫 (1986) 「日本統治下の台湾における公学校教育 日本人教師からの証言による構成」『釧路短期大学紀要 第13号』、駒込 武 (1991) 「台湾における皇民化教育の聞き取り調査」『成城学園教育研究所 研究年報 第十四集』、所澤 潤 (1993) 「聴き取り調査：外地の進学体験 台北師範付属小から台北高校、台北帝大を経て内地の帝大に編入」『入学試験の制度及び試験問題の分析に基づく近代日本の学力の歴史的研究』平成二年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書、所澤 潤 (1995~2004) 「聴き取り調査：外地の進学体験 () ~ ()」『群馬大学教育学部紀要 人文社会科学編 第44巻~第53巻』、前田 仁 (1993) 「日本統治下台湾の教師たち」『南方文化 第21輯』、前田 仁 (1994) 「日本統治下台湾の教師たち(2)」『南方文化 第22輯』、前田 仁 (2000) 「戦時下台湾における皇民化教育体験者からの聞き取り」『天理大学学報 語学・文学・人文・社会・自然編 第百九十三輯』、中田敏夫 (1997) 「台湾における元公学校教師たちによる談話」『愛知教育大学国語国文学報 第55集』、新井淑子 (2001~6) 「植民地台湾の女教員史 初期女子教育と初等教育の女教員」『埼玉大学紀要 教育学部、50(2)~55(2)』、新井淑子 (2007) 「植民地台湾における戦時下の玉川国民学校と平和国民学校の教員の意識と実態」『埼玉大学紀要 教育学部、56(2)』 などがある。

以上は、いずれも入念に聞き取り調査を行ったものと思われるが、対象が教師や大学生などのように限定されている場合が多く、また、植民地統治を断罪するという観点から聞き取り調査を行っていると思われるものもあって、例外的な事態を一般的な事態のように報告していると思われるようなケースも見られる。

本稿は、それらの点に鑑み、日本による台湾統治の是非を論ずるよりも、あくまでも当時の台湾に暮らしていた人々がどのような思いで日常生活を送っていたのかという点と、日本人と台湾人がどのような交流を重ねていたのかという点に重点を置いて、可能な限り様々な経歴の人たちに聞き取り調査を行ったものである。

その際、現在では差別語と言われかねない言葉も出てくるが、当時としては普通に使われていた言葉なので、敢えてそのまま表記することにした。当時は、台湾人も日本人であったので、公的な場では、日本人は内地人、台湾人は本島人、漢族ではない台湾の先住民は高砂族と呼んでいたが、一応分かりやすさを考慮して、原則として日本人は内地人、台湾人はそのまま台湾人、先住民は「アミ族」のように具体的な個々の民族名で呼ぶことにしている。報告者の年齢は、内地人では満年齢の場合もあるが、内地人以外は、原則として数え年である。

また、聞き取り調査の対象の時期が、65年以上も前の時代なので、一部の事実関係や年代などに、記憶違いや言い誤りなどによって錯誤が生じている可能性があるが、

それらは全て調査者である柴の責任であることを明確にしておきたい。

インタビューのテープを原稿に起こす際、一部、大阪府在住の甲田廣行氏と熊本市在住の北原知奈氏の協力を受けたことを記して感謝の意を表したい。

(1) 私の台湾人生

田宮良策 (1910年生) 台北一中；台北高校卒；台湾総督府内務局勤務

私の父は、秋田県の横手出身ですが、私が三歳の時、朝鮮総督府に勤めることになり、当時の京城に移住しました。小学校は、桜井町尋常高等小学校に通いました。ただ、半年ぐらいしかいなかったため、京城の思い出としては、父に肩車してもらって南大門市場に買い物に連れて行かれたことぐらいしか残っておりません。

その後、父が広島県の税務監督局に転勤になって広島市内の中島小学校に転校し、さらに二年生になって、中国山地の山々に囲まれた毛利元就の居城の吉田町の小学校に通いました。その学校は田舎の複式の小さな学校でしたが、洋装の子供は私だけでした。他の子供たちは、膝までの着物に擦れ切れた帯を締め、靴ではなく藁ぞうりで、風呂敷包みを提げて通っておりました。農繁期になると、弟や妹を背中に括り付けて学校に来て、その子供たちを先生方が面倒を見ていました。そのような光景は、朝鮮の内地人の間では全く見られないものでした。まるで日本人の中に一人だけ異人種が紛れ込んだようで、他の子供には苛められて、よく泣いて帰ったものでした。

三年生になった時に、台湾総督府に移った父に従って台湾南部の屏東の小学校に転校しました。校舎は内地と同じく木造でしたが、学校の設備は内地の学校よりずっと整っていましたし、先生も師範学校出の優秀な先生が多かったような気がします。

ただ、当時は、山から原住民が下りて来て首狩り事件を起こしたりして物騒だったので、一旦故郷の横手に避難することになりました。横手の学校に通ったのですが、どうせ直ぐに転校するのだからと勉強に身が入らず、一年間遊んでいたようなものでした。

その後、再び屏東に戻り、四年生に編入して六年の一学期まで通学しました。屏東小学校は、内地人の学校でしたが、何人か日本語の流暢な台湾人の子供も通学しておりました。別に苛めたりはしませんでした。子供でしたので口喧嘩などをすることはありました。

六年の二学期になって進学のことを考え、台北の第一師範付属小学校の編入試験を受けて、転校しました。翌年大正 12 (1923) 年の 3 月に卒業するはずでしたが、この年の 4 月 18 日に昭和天皇 (* 当時は摂政) が付属小学校に行啓することになったため、卒業が一ヶ月延び、4 月に卒業して台北一中に入学しました。台北一中も内地人の学校でしたが、裕福な台湾人の子供も何人か通っておりました。

当時は総督府の方針として内台融和を掲げていましたので、台湾人の級友を苛めたりすることはなく、先生方も差別したりはしませんでした。ただ、付き合いは学校の中に限られ、お互いの家に遊びに行くというようなことはありませんでした。当時は、二年生の頃まで台湾が日本の植民地であることに気付かなかったような気がします。ただ、内地から海を隔てて遠く離れている地方の一つといったような感覚でした。

台北一中を卒業して台北高校の文科乙類に入学しました。台北高校は、内地人と台湾人の共学でしたが、台湾人の級友たちとは仲良く付き合っていました。ただ、時々何かで対立したりすると、台湾人の級友の方で譲歩する場面が多かったように覚えています。

お互いの家に行き来した覚えはありませんでしたから、台湾人の級友たちと心から分かり合えたかという疑問です。実際、私が総督府の役人になった途端、それまで親しくしていた台湾人の友人が遠く離れていってしまったことがありました。

内地人に生まれ育ったというだけの理由で、常に台湾人より上位に居座る差別的な体制に友人は堪らぬ不快感を持ったに違いありません。私は、そうした差別に気付きながらも、自らの居心地の良さに慣らされて、知らず知らずの内に植民地意識が体質化していたのでしょうか。いくら内台融和を唱えても、台湾人の学生には、やはり支配されているというような植民地としての民の悲哀を感じていたのかもしれない。そのようなこともあって、次第に台湾は日本の植民地であると実感するようになりました。

また、台北高校には、内地で試験を受けて入って来た内地人の学生もおりました。そのような学生が台湾人を異人種のように見て、バカにするようなことがありました。ある日、弁論大会があった時、内地から来た学生が「水牛は黄牛（和牛）に成り得るか」という題で演説したことがありました。要旨は、「水牛（台湾人）は黄牛（内地人）」には成れないということだったのですが、これを、内台融和を唱道していた総督府の文教局長が聞きつけて、烈火の如く怒ったということです。早速、校長が呼びつけられて「一体どういう教育をしているんだ」と散々油を絞られたそうです。

当時の、校長は自由主義の教育で有名な人でしたから、内地には住みにくくなって台湾に転勤させられたのでしょうか。その事件のせいか、三年の時に校長は他の学校に異動させられ、その後釜に、『次郎物語』で有名な下村校長が赴任してきました。その下村校長が急に締め付けたために、学生たちが反抗してストライキを起こしたことがありました。

台北高校を卒業してから東京大学を受験しましたが、落ちてしまいました。東北大学には受かっていたのですが、癩だったので東北大学を中退してもう一度東京大学に挑戦しました。幸い合格したのは良かったのですが、徴兵の猶予期限が過ぎていて徴兵検査を受けることになってしまいました。仕方なく昭和6年に父の故郷の秋田で

検査を受けた結果、乙種合格になりました。ただ、検査官からすぐ軍隊に行く必要はないから学校で勉強なさいと言われ、そのまま学業を続けて大学を卒業しました。

その後、昭和 10 年に台湾総督府の内務局の地方課に入りました。仕事は、施政の基本である内台融和政策の実施でしたが、実務を通して台湾が植民地であることを強く実感するようになりました。それでも、台湾人の部下たちは協力的で、真面目に仕事をこなしてくれました。

支那事変の起きた年の翌年の昭和 13 年には、二等兵として広東の上陸作戦に送られてしまいました。翌年、海南島の上陸作戦に参加し、その次は、甘肅省への派遣軍に編入させられました。その際、討伐戦で大怪我をして病院船で内地に戻りましたが、結局昭和 15 年には除隊させられてしまいました。

すぐ台湾総督府に戻り、台北市の助役に就任しました。その後、もう一度軍隊に召集されてルソン島の飛行場を奪還するという部隊に編入させられましたが、現地に行くことなく一日で帰されてしまいました。

私は、総督府に戻ってからは、台湾人の同化という問題に興味を持ち、図書館に通って東洋史の専門家の書いた著作も読んでみました。結論として、同化は植民地統治の理想ではあるが、現実には難しいということを知りました。台湾の場合は、五、六百年という長い年月を掛ければ、可能ではないかと思いましたが、現実的には、完全な同化は無理で、せいぜい自治権を要求されるようになるのが関の山ではないかという気がしてきました。

せめて内地人と台湾人の通婚が進めば、同化も速く進むと思いました。実際、昭和 11 年に、私の友人が台湾人の資産家の娘さんと結婚しました。その年の秋に、新居を訪ねたことがありますが、その時、奥さんは友人を立てて、内地式に睦まじく暮らしておりました。

それが終戦になって、友人が結核になってしまい、結局離婚して二人の子供を台湾に残したまま、友人は治療のため病院船で内地に帰って行ってしまいました。当時は、結核は死病でしたから、奥さんや子供の将来を案じての決断だったのでしょうか。数年後、一旦回復した友人は内地人の女性と再婚しましたが、それも束の間で、病状が悪化して結局亡くなってしまいました。その後、台湾人の奥さんや子供たちが、どのような人生を送ったのかについては皆目分かりません。

もう一つの例としては、台湾に単身赴任中だった友人が、ふとした縁で台湾人の女性と結ばれました。子供が出来ましたので、現地妻のような関係で終戦を迎えましたが、やはり終戦を契機に、女性の将来を案じて離婚してしまいました。その際、相当の財産を女性に残し、内地に帰還した後も、生活費を送り続けていました。内地人の男が台湾人の女と結婚した例は、寡聞にしてこの二例しか知りません。

逆に、内地人の女が台湾人の男と結婚する例の方が、ずっと多かったような気がし

ます。それは、当時、台湾人の資産家の息子たちが内地の大学に入学する 경우가多く、そこで内地人の娘と知り合う機会が多かったためでしょう。

また、内地から赴任してきた独身の役人や先生は、結婚する際、台湾在住の内地人の娘を選ばずに、わざわざ郷里から迎えるという風潮もありました。それは台湾育ちの内地人の娘は、ほとんど中流以上の生活をしているため、台湾人の女中さんを雇っている場合が多く、家事が得意でないということと、植民地特有の自由な環境で育ったために我が儘で気の強い面があるということから敬遠されたのでしょう。当時の台湾では、きつい仕事や汚い仕事は、全て台湾人の分担で、内地人が関わることはなかったのです。

終戦当時、私は台北市の第三助役で、土木、営繕、水道関係の業務を所管しておりました。連日、残務処理に追われていましたが、多少の行き違いはあったにしろ、台湾人の部下たちは反抗することなく仕事を処理してくれました。

まだ、日本軍が健在だったということもあったのですが、社会は、それなりに秩序が取れていて安定していました。一部、日本の統治に反感を持っていた者や警察に痛めつけられた者が報復した例がありましたが、朝鮮や満洲の場合に比べたら、ずっと平和的に移譲されたものと思います。

現在、二十一世紀を迎えて日台関係は新たな局面を迎えているように思われますが、二十世紀のある時期、私たちは、台湾の人たちとは同胞として過ごしたということ、殊に私のような在台二世との間には台湾人と和合し得るような芽生えがあったということだけは、記録に残しておきたいものと思っています。

(2) 仏の道

釋 悟願 (俗名；郭廖 燕*郭は夫の姓) (1925年生) 基隆宝公学校卒；

台北市役所

私は、桃園の大溪で、鉄道の工夫の家に生まれました。両親は、二人とも無学で貧しかったので、娘は五人全員養女に出し、第一人だけを家に残しました。私は、生後二ヶ月の時、基隆駅に勤めていた養父の家に養女として出されたそうです。当時の貧しい家庭ではよくあることでした。

養父は、祖母が45歳の時の子供だそうです。祖母は、養父の嫁にするため、他家から女の子をもらってきて養父と一緒に育てておりました。当時の台湾では、貧しい家の息子は結婚費用を工面できないため、嫁をもらうことは出来ませんでした。それで、息子の嫁にするため、貧しい家の娘を子供の時にもらってきて息子と一緒に育て、成人に達した正月の夜に結婚させるという風習があったのです。そのような娘を台湾語で「媳婦仔 (シンブア)」と言うのですが、実際、私の妹の一人は、他家にもらわ

れて行って、その家の公学校 (*台湾人の通う小学校) を出た息子と結婚したそうです。

当時、養父は、まだ未婚だったのですが、その母が淋しいからと言うので、私を養女にしたのだそうです。私が養女に行ってから、養父は、その兄妹のようにして育てた娘と結婚したのですが、養父 27 歳、養母が 19 歳の時でした。養母は、私とは 15 歳違いでした。養父は、公学校は出ていましたが、養母は、当時の台湾人の女性の場合として、無学でした。ただ、結婚前に内地人の家で女中をしていたそうで、日本語は話せました。ちなみに、実の両親は、二人とも全くの無学でした。

養父は結婚して、下に弟四人と妹一人が出来ましたが、幸い養母は優しい人で、私を可愛がってくれました。当時の台湾には、纏足という陋習がありましたが、私の祖母や養母は、下層階級に属し、労働に従事しなければならなかったため、幸いにも纏足は免れておりました。

公学校に入学する前に、養母の妹が内地人の家で男の子の子守をしていたので、私は、その子と簡単な日本語で話をしていて記憶があります。基隆は、内地への連絡船が発着する台湾の表玄関でしたから、内地人が沢山住んでいて、日本語が大分普及していたのでしょう。

当時の基隆は、実質内地人の建設した街なので、中心部には内地人が住み、その周辺部には台湾人が住んでいました。台湾人と内地人は、表面的には仲良く暮らしていて、街中で大人同士が喧嘩をするというようなことは、ありませんでした。

私は、幼稚園には行きませんでした。数え年 9 歳で基隆の台湾人の学校である宝公学校に入学しました。校長先生を始め、大部分が内地人で、一クラス 60 人ぐらいの女子だけのクラスでした。女子だけですから、喧嘩をしたり苛めたりするということもなく、みんな仲良くしていました。中には、私より何歳か年上の人もいて、私は二番目に小さい生徒でした。それで、一番前の席に座らされたので、先生に目を掛けられ、成績はいつも優等でした。

一年の時の先生は、佐藤先生という内地人の若くて美人の先生でした。一年の時から日本語を習いましたが、二学期からは出来るだけ日本語を使うように言われました。二年・三年は森村先生、四年から六年までは郡司先生で、全員内地人の女の先生でした。

私は、先生からは「廖氏 (*当時の台湾の女性には姓に「氏」を付けて呼ぶ習慣があった) 燕」さんと、日本語の漢字音で呼ばれていましたが、友達からは「燕」さんと、名前だけを日本語の漢字音で呼ばれていました。ただ、家や近所の人達からは当然でしょうが、「燕」と、台湾語の漢字音で呼ばれていました。

公学校では、三年ぐらいになると、学校の中ではもちろん、通学の途中でも、友達とは日本語で話しておりました。先生から、通学の途中でも台湾語を使わずに日本語

で話しなさいと教えられていたためです。当時は、自分たちも日本人なのだから、日本語を使うのは当然だと思っていましたので、別に反発はありませんでした。ただ、家に帰ると、養父母は、日本語が余り出来ませんから、台湾語を話しておりました。

そういうことで、学校で台湾語を使うと叱られました。叩かれるということはありませんでした。ただ、中には、いたずらをする人がいて、お尻を鞭で叩かれていました。一度、二年生の時、クラスの生徒がいたずらをしたのか、言うことを聞かなかったのか、先生に強く耳を引っ張られ、耳が少し裂けて血を流していたことがありました。今でしたら、先生による傷害事件として問題になっていたでしょうが、当時の先生の権威は今とは比較になりませんから、そのようなことで親が怒鳴り込んでくるというようなことは、まずなかったのです。

宝公学校では、可愛いセーラー服に、靴を履いて通学していました。教科書も風呂敷ではなく、ランドセルに入れて通っていました。弁当は、蓬莱米（*ジャポニカ米の一種）で、肉や魚は嫌いですので卵や野菜をおかずにしていましたが、日の丸弁当の日もありました。

毎日の朝礼の時には、宮城遥拝をしておりました。また、天長節などの祝祭日には、校長先生が白い手袋をはめて、教育勅語の奉読をしておりました。教育勅語は、二年生の頃から全部暗記させられていました。公学校の唱歌は、全部日本語で台湾語の唱歌を歌った記憶はありません。

四年生から裁縫の時間があって、運針から初めてパンツや運動シャツなどを縫っておりました。五年生からは、刺繍や編み物も習いました。料理は、御飯の炊き方や包丁捌きを習いましたが、本格的な料理の作り方は習いませんでした。また、五年生からそろばんを習って簡単な加減乗除はできるようになりました。

五年生の時に、父が台北に転勤になりましたが、鉄道員の家族は無料だからと言うので、転校せずに卒業するまで台北から汽車通学しておりました。私は、勉強が良く出来たので、ずっと優等生で通し、卒業の時に、市長賞を頂きました。また、六年の時、クラスの生徒60人を六組に分けて一週間に一回基隆神社の清掃に行き、一年間続けました。それが認められて、基隆市から善行児童として表彰されました。

卒業後は、女学校に進みたくて、基隆高等女学校を受験して合格しました。でも、両親には、お金がないからと反対されました。それで、「夜アルバイトするから行かせて」と頼んだのですが、「お前が女学校に行くと、弟たちが中学校に行けなくなる」と説得され、泣く泣く諦めました。ちなみに、弟は台北の私立の中学に入りましたが、妹は公学校だけでした。

私のクラスからは、他にも台北第三高女に一人、基隆高女に一人が進学しました。当時は、基隆のような都会でも、女の子は半分ぐらいしか公学校に通っていなかったように思います。宝公学校には、二年制の高等科もありましたが、高等科に進む人も

あまりいませんでした。ですから、女学校には行けませんでした。公学校を出してくれただけでも養父母には感謝しています。

昭和 15 年に公学校を卒業して、台北州庁の給仕になりましたが、給料は 12 円でした。一年後に、電話交換手になり、16 円もらうようになりました。その後、台北市役所の和文のタイピストの試験を三人の高等女学校卒の内地人と一緒に受けたのですが、私だけが合格しました。一ヶ月ほどタイピストの学校に通って勉強していたのが効いたのだと思います。月給は 30 円でしたから、台湾人の二十歳前の娘にしては、結構良い給料でした。

ちなみに、父の給料は 50 円前後ではなかったかと思います。父は、賭博が好きで、家に金を入れないこともありましたので、私の給料は全部家に入れていました。内地人には、宿舍料という名目で本俸のほかに六割の加俸がありました。当時は、それは制度上決まっていることだからと、別に不満には思いませんでした。市役所の中では、台湾人同士でも日本語を使って、台湾語を使うということはありませんでした。

内地人の同僚とも仲良く付き合い、内地人の上司からも可愛がられて、差別されたり苛められたりしたことはありませんでした。ただ、台湾人は、課長級以上には一人もおらず、係長がせいぜいで、給仕や小使の人が多かったように思います。四つ違いの上の弟も中学校を出たのに、総督府の社会科の給仕をしていましたが、その後、区会事務所の職員になりました。

市役所では、国語講習会や青年団を管轄する社会教育課に属していました。仕事は忙しかったのですが、皆さん協力してくれました。その時は、総督府に勤めていた弟の発案で、改姓名をして「松原敏枝」と名乗っていました。私の家は、国語常用家庭ではありませんでしたので、本来ならば、許可されなかったのですが、市役所に勤めているということで許可されたものと思います。

当時、市役所の台湾人の半分くらいが改姓名をしておりました。改姓名したお陰で、配給が少し余計にもらえることになりましたが、それよりも本当の日本人に成れたような気がして嬉しかったことを覚えています。当時は、日本人になりきっていたので、台湾の独立や中国への復帰などは、考えたこともありませんでした。

家は、市役所から歩いて 30 分ぐらいのところがありました。当時、バスはありましたが、本数が少ないので歩いて通っておりました。男の人の中には、自転車で通っている人もおりました。

当時、台湾人は、貧しい人が多かったのですが、働けば飢え死にするようなことはありませんでした。御飯が食べられなければ、お粥に芋を入れて食べていました。当時は、悪い人を厳しく罰していましたから犯罪は少なく、安心して暮らしていけました。ただ、戦争時に内地人との間に配給の面で差別があったのが不満でした。

徴兵制が布かれる前でも、自ら進んで志願兵になった台湾人も沢山いました。日本

が負けたという知らせを聞いた時は、これからどうなるのかと不安になり、泣いてしまいました。

その後も、市役所の財政課にタイピストとして勤め、1948年に結婚しました。夫は、内地の伯母のもとから中学校に通って明治大学の商学部を出た人で、学徒兵として出征していた人です。最初は高等法院の書記官になりましたが、支那人とは合わないと言って辞め、台北市役所に勤めるようになりました。知り合うようになって夫に求婚されたのですが、裕福な夫の家とは釣り合いが取れないと思って断りました。

しかし、夫が親の反対を振り切って家出をしてきたので、仕方なく結婚することにしました。その後、子供が出来たのを契機に市役所を辞めました。

夫の実の母は、夫が8歳の時に亡くなっていました。当時の裕福な家庭ではよくあることで、舅の後妻が二人いましたので、こちらを立てればあちらが立たずというふうに仕えるのが大変でした。それで、一旦別居したのですが、親不孝と言われるという夫の意向で、また同居することになりました。それでも、二人の姑に仕えるのが大変で、42歳頃に、また別居しました。主人は50歳の時に中風になり、64歳で逝ってしまいました。

養父母は、道教の神様を拜んでいましたが、私は子どもの頃から観音様が好きで、部屋に観音様を祀って、朝晩拜んでいました。結婚前から、出家したいと思っていましたが、子育てで思いが叶いませんでした。結局、60歳の時、夫が養老院に入って療養中に、子供たちの反対を押し切って台北の仏教蓮社で剃髪し、出家しました。夫は間もなく亡くなりましたが、私の出家を理解してくれました。

その後、ずっと仏教蓮社で仏道に励んできました。今は、お迎えも近くなりましたが、仏様に仕える喜びで幸せな毎日を過ごしております。

(3) 恩師の情け

陳 淑媛 (1925年生) 長浜公学校 ; 台南師範学校臨時教員養成科卒

私の父は、澎湖諸島出身ですが、学校には通わず、書房 (* 漢学を主とした初等の教育機関) に通っただけです。一方、母は当時の台湾女性の常として、全くの無学でした。私は、この両親の下で、台北の太平町に生を享けました。

当時、父は、台湾人の友人と台北州で炭鉱を経営しておりました。父が25歳の時、炭鉱の事業所で撮った写真が残されていますが、それを見ると、父は洋服にネクタイを締めて帽子を被り、口髭を生やしてステッキを片手に気取ったポーズで写っております。若い頃は、なかなかのハイカラボーイだったのでしょう。

それが、私が5歳の時、父は炭鉱の事業に失敗し、台東庁の新港郡長浜庄に都落ちして、生活用品を取り扱う雑貨屋を開くことになりました。当時の東部台湾は、ア

ウスアー(後山)と呼ばれる未開の地で、長浜庄にはアミ族と台湾人が住んでいました。長浜は、当時「加走湾」と言い、台湾山脈を背に、東は太平洋の海岸線に面した小さな部落で、電灯や水道もなく、マラリヤの汚染地域でした。当時のアミ族は、男女共腰巻姿で、食事は手摺みでした。

昭和7年、数え年の8歳で、台湾人とアミ族の子供の通う長浜公学校に入学しました。公学校は、一学年一クラスで、50人ぐらいおりましたが、アミ族の子供の方が多かったように記憶しています。一クラスしかありませんから、男女が一緒でしたが、男と女は左右に分かれて座っておりました。ただ、台湾人とアミ族は別々の席ではなく、二人掛けの机に混ざって座っていました。

長浜公学校には、内地人の先生だけではなく、台湾人の先生も二人おりましたが、この先生方は、終戦後小学校の校長になっています。また、女の先生は内地人の先生一人だけでした。

一年の時の担任は、内地人の女の先生で、台湾語を使わず、掛図を使って、「ハナ」とか「ハタ」と教えてくれました。二年と三年の時は、台南師範や台中師範を出た優秀な台湾人の先生に教わりました。

師範学校を出た先生方は、天長節などの式日には、文官服にサーベルを掲げ、金筋の入った帽子を被っておりました。また、冬は黒い文官服、夏は白い文官服を着て教えておりました。先生方は、台湾人とアミ族を一切差別することなく、平等に教えておりました。警察もアミ族に対しては寛大でした。

一年の時は、台湾語やアミ語で話していましたが、二年生からは、「台湾語やアミ語を使ってはいけない」と言われたので、出来るだけ日本語で話すようになりました。三年生になると、台湾人もアミ族も不自由なく日本語を話せるようになっていました。

当時の長浜の子供は、台湾人の場合、制服などはなく、男女とも台湾服で、靴は履かず、裸足でした。カバンもなく風呂敷に教科書と筆記用具を包んで通っておりました。アミ族の場合、やはり制服はなく、学校内では粗末な民族服を着ていましたが、やはり裸足で、風呂敷片手に通っておりました。ただ、三年生の頃から、台湾人もアミ族も天長節などの祝祭日には靴を履くようになっていました。

また、三年生になると、台湾服ではなくスカートをはくようにと言われ、知り合いの内地人の奥さんをお願いしてスカートとブラウスを作ってもらい、それを着て学校に行きました。すると先生に呼ばれて教壇に上げられ、「皆さん、こういう服装にしなければいけませんよ」と誉められました。

弁当は、台湾人の場合、アルミの弁当箱に、粟や米の御飯に台湾のおかずを詰めて持って行きましたが、アミ族の場合、ピンロウなどの葉に芋や餅を包んで来て、手摺みで食べておりました。ただ、アミ族も五年生頃になると、箸を使って食べるようになっておりました。

当時は、改姓名の前の時代ですから、アミ族も「パナイ」とか「カリテン」という民族名で通っていました。パナイは女の子でしたが、後に、台南師範学校を出て終戦後に小学校の校長になったアミ族の男の人と結婚しています。

同級生に、「アヤトコン」というアミ族の男の子がおりました。成績優秀で、私の前の級長を務め、毎日の朝礼では、前に立って生徒に号令を掛けておりました。この生徒は、卒業後、台東の農業学校に進んだと聞いております。

また、同級生のアミ族で、改姓名していた沢田という人がおりました。成績優秀で、高等科を出て、終戦後、小学校の校長になりました。その後、国民党に入党して台東の議員になりました。議員になってから、日本の大学に入学し、休暇を利用して大学に通っていたという話です。議員を何期か務めた後、花蓮港の師範学校に入って教員をしていた娘にバトンを渡して引退し、今は悠々自適の毎日を送っているそうです。

アミ族の子供たちとは、喧嘩することなく、仲良く付き合っておりました。台湾人の男の子同士は喧嘩することはあっても、台湾人とアミ族の子供が喧嘩することはありませんでした。ただ、台湾人はアミ族に対して内心優越感を持って接していたことも事実でした。

当時、子供たちは、悪戯をしたり、先生の言うことを聞かなかったりすると、鞭でお尻を叩かれていました。中には酷く叩かれて抗議する親もいましたが、大抵の親は、「悪いことをした時は、びしびし叩いてください」と言っていました。

公学校では、毎週土曜日の午後、全校の先生方が家庭訪問に行っていました。一人でも文盲のないようにとの有り難い教育方針からでした。また、年に二、三回、校庭に巨大な釜を据え、海草を煮立てて全校生徒に飲ませ、回虫の駆除に努めておりました。

六年生の時の校長先生は、角田信衛先生でした。いつも、「おーい、陳ちょっと来い」と呼ばれて慌てて駆け付けると、頭を撫でてくれ、「しっかり勉強せい」と言われました。

当時、上級学校へ行くには花蓮港まで行かなければなりませんでした。六人兄弟の一人娘なので、母はどうしても進学を許してくれませんでした。来る日も来る日も、父母の争いは絶えず、とうとう進学を諦めなければなりませんでした。昭和13年、数えで14歳の私は、長浜公学校の六年生を卒業しました。

その後の三年間、青年団へ入団して活動しておりました。その間、半年間ほど、花蓮港の洋裁学校に通っていたことがありました。ある時、教室で内地人の級友たちが「リーさん(*「リー」とは台湾語で「あなた」の意であって、本来蔑称ではないが、台湾人には蔑称として受け取られていた)」と言っているのが耳に入りました。それで、私が「リーさんと言うのは誰ですか」と聞いたら、その級友たちはバツの悪そうな顔で黙ってしまったことが今でも記憶に残っています。

実際、内地人の中には、特に警察官の子供などには、台湾人に対して「リーさん」とか「チャンコロ」と言って差別する者がいたのも事実です。そんな人たちの中には、終戦後、日本に帰る際、台湾人に殴られた者もいました。ただ、日本から来た人たちは、概して、台湾人を露骨に差別することはありませんでした。

また、昭和15年に、長浜で前代未聞の殺人事件がありました。それは、アミ族の巡査の妻と長浜の有力者である台湾人の男が深い仲になってしまったのです。それを見かねた内地人の署長がその台湾人の男に何度か注意しました。すると、それを逆恨みした台湾人の男が、ある夜、内地人の署長を襲って殺してしまったのです。それは、長浜のような田舎町においては驚天動地の大事件でした。

たまたま、その男の息子は、私の公学校の同窓生でしたが、事件当時は、内地の小倉の中学に留学していました。事件後、台湾に戻って来て、父が殺人事件を犯したにも関わらず、本人は先生になって公学校に勤めていました。

その男は逮捕され、台北の刑務所に収監されましたが、終戦とともに釈放されました。その際、「お前は長年の監獄暮らしで、栄養が足りない」と言われ、栄養剤を打たれたそうです。その夜、台北の知人の家を訪ね、「体がだるくて眠い」と言って眠り込んでしまったとのことでした。

その知人の奥さんが料理の材料を買って帰って来たら、その男は、既に死んでいました。その知人は、とんだ濡れ衣を着せられたと、ぼやいていたそうですが、村の人たちは、「やっぱり日本人は、ただでは済まさなかった」と、噂をしておりました。

そんな恐ろしい事件もありましたが、先生方は、本校初めての女子級長で、また一番で卒業した私を大変気に懸けてくれました。それで、昭和16年、台湾総督府台南師範学校の臨時教員養成講習会の選抜試験が各郡役所で行われるので、試験を受けるようにと勧めてくれました。受験資格には、女学校、高等科卒業あるいは中退者のみとあり、公学校卒業だけで学歴の足りない私でしたが、広瀬春次校長先生の推薦で選抜試験を受け、新港郡の代表として、ただ一人合格しました。

昭和10年4月の台湾大地震では、親戚が多数亡くなり、また、昭和15年には、父がマラリヤに罹り、42歳の若さで黒水病のため亡くなっていました。二人の兄は、職を求めて都会へ行き、残された幼い三人の弟と母との五人暮らしは大変貧しいものでした。

いよいよ台南師範へ行く日、校長先生は初めての一人旅を心配して台南市の地図を描いてくれ、宿屋にも紹介状の心配りをしてくれました。また、奥様からは、多額のお餞別を頂き、暫し涙を止め得ませんでした。

長浜から台東には、バスで一日掛かり、台東から台南は、早朝からバスに揺られて夜遅く着きました。生まれて初めて見る大都会に西も東も判らぬ田舎者は、頂いた地図の有難さに茫然と立ち尽くすだけでした。翌朝、人力車は恥ずかしくて、どうして

も乗れませんでした。荷物だけを積んで、車の後からとぼとぼと遠い道程を学校まで付いて行きました。

赤煉瓦の壮大な三階建の校舎の偉容に威圧され、明日からここで学ぶと思うと、身震いが止まりませんでした。我ら臨教生は、全島より男女百人で二クラスに分かれましたが、女生徒は二十数人だけでした。本校生は男子だけで、約七、八百人おりました。毎朝の朝礼には、恥ずかしくて顔を上げることもできませんでした。

ノモンハン帰りの松延教官の厳しい軍事訓練や、歴史の時間に「乞食」の言葉にはっと驚き、後で「古事記」と判り、自分の無学を恥じて懸命に勉強しました。先生方には、常々「お前たちは、人の先生になるのだから、生徒の模範になるような立派な日本人であれ」とは言われましたが、「生徒が立派な日本人になるように教育せよ」とは言われませんでした。また、「夢の中で話している言葉が日本語だったら、立派な日本人だよ」とも言われました。先生方は、一切台湾人と内地人との差別をするようなことはありませんでした。

一学期の試験では、及第に達しませんでした。二学期の教育実習も、時間的な制約上、台南師範付属小学校の四年や、台南市内の港、末広、明治の各学校での授業参観で代用し、実際に教壇に立って教えることはありませんでした。

台南師範では、臨教生も内地人と台湾人の区別なく、一ヶ月 15 円の官費をもらいました。巡査の本給が 30 円前後の時代でしたから、下宿しても十分おつりが来ました。

昭和 17 年 3 月 17 日、無事に終了式を迎え、必ず母校に服務するとの堅い約束のもとに、3 月 31 日、新港郡役所で辞令をもらい、4 月 1 日、長浜公学校を改称した長浜国民学校の助教となりました。月給は 32 円でした。

子供たちへの教育方針は、明治天皇の教育勅語の教えに則り、一視同仁の精神で、立派な日本人になるようにと、ただ正直一途の教育でした。最初に担当したのは、三年のクラスで、次いで四年、二年の順に教えました。教室では、一切台湾語を使わずに日本語だけで教えました。子供たちは三年生ぐらいになると、ほとんど不自由なく日本語が話せるようになっておりました。ただ、言うことを聞かない場合には、体罰を加えることもありました。

実際に先生になって子供たちを教えてみると、成績は、やはりアミ族よりは台湾人の方が上で、良く出来るアミ族は十人に一人ぐらいでした。ただ、アミ族の級長がいたことも確かでした。

昭和 17 年頃になると、アミ族の子供たちも、粗末な民族服ではなく、上着を着てズボンやスカートに靴を履き、箸で弁当を食べるようになっておりました。ただ、その当時でも、日本名を名乗っていた子供は少なく、半分以上は、相変わらずアミ族の名前でした。アミ族が全員改姓名したのは、終戦後に国民党が入って来て、漢族名へ

の改姓名を強制させられてからでした。

私の主人は、台南県の麻豆の公学校を首席で卒業し、高等科二年を終えて、台南師範の講習科(三年制)に入学しました。卒業後、長浜公学校の訓導になったのですが、月給は50円でした。ただ、同級生の内地人の訓導は、自分より成績が悪かったのに、加俸という名目で六割余計もらっていると、よく不平をこぼしておりました。

当時、自分は内地人とは違うと思っていましたが、だからと言って中国人と同じだとは思っていませんでした。ただ、ひたすら立派な日本人になることだけを念じておりました。ただ、父は時々、我々の祖国は中国だとは言っておりました。

日本が負けたと聞いた時は残念で、私だけでなく、主人も母も泣いてしまいました。校長は、部落の人に「ごめんごめん、日本が勝つと言っていたのに負けてしまって」と謝っていました。アミ族の中には悔しくて泣いた人も多かったのです。

ただ、終戦後、一ヶ月ほど経つと、国民党の宣伝に乗せられたのか、台湾人は「これで自分たちは祖国の中国に帰れる。優しい祖国の下で自由に暮らせる」と思うようになりました。しかし、それが甘い幻想であることが分かるまでには、それほど時間は掛かりませんでした。

内地人の先生方が帰る時、私たちは一年分の月給をまとめてもらいました。主人は1000円ほど、私は500円ほどもらいました。ただ、それも束の間、国民党がインフレを起こし、4万円が1円になったために、スッカラカンになってしまいました。

校長先生は、一年後に帰りましたが、その間、仕事が出来なかったので、母は、校長先生や内地人の先生に肉や卵や野菜などの食べ物を届け続けました。校長先生が帰って行く時、主人も私も日本と一緒にいきたいと思って共に涙を流しました。

終戦当時、長浜国民学校の先生には、師範学校を出た台湾人の先生が二人と、高等科を出たり、検定試験を受けて合格したアミ族の先生が三人いました。他に、内地人の校長と教頭と台中師範を出た沖縄出身の先生がいました。終戦後には、長浜国民学校にも中国人の先生が一人来て、北京語で教え始めましたが、生徒たちにはチンブンカンブンでした。

終戦後の混乱期には、様々な悲劇的な事件が起こったことも事実です。私の師範学校の同級生の佐藤さんは、大陸から来た中国人の警察官と、ふとしたことから恋仲になってしまいました。両親が許さなかったので、家族が日本に帰る際に、その警官と駆け落ちしてしまいました。

その後、台東の南の大武の小学校に勤めていたのですが、ある日、私に電話を掛けて来て、自分を長浜の学校で使ってくれないかと言ってきたのです。その時には、主人が長浜の小学校の校長になっておりました。佐藤さんの話ですと、その中国人の夫は、結婚してみると、酒は飲む、博打は打つ、女は買うの、とんでもない放蕩者だったのです。でも、その時には、既に男の子の母になっていました。

主人も助けてやりたいという心は、やまやまだったのですが、もう日本人を先生として雇うことは、出来なくなっていたので、どうしようもありませんでした。そこで、事業をしていた私の兄に雇ってもらうことにしたのですが、その時は次の子供を妊娠していたので、とうとう来ませんでした。

その夫が、後で新港の警察署長になったので、ある日訪ねて行ったところ、「自分は、悪いことばかりやり、妻を失望させて本当にすまない」と、その時は神妙に反省の弁を述べておりました。

その後、佐藤さんからは連絡がなくなり、離婚したのか、日本に帰ったのか、台湾に留まったのかどうなったのか、皆目分かりません。本当に残念なことでした。

半世紀にわたる日本の植民地の期間には、様々な事件があり、日本の統治にも光と陰がありましたが、こと教育に関しては日本の内地に勝るとも劣らない成果を挙げたものと思います。恩師の長浜公学校の校長先生のような素晴らしい日本人の先生のお陰で、今日の台湾の繁栄があると申しても、決して過言ではないでしょう。

続